울산대학교 연구논문집 제20권(인문·사회과학편) 제2호, pp. 103~116, 1989
UOU Report Vol. 20,(Humanities and Social Science) No. 2, pp. 103~116~1989
University of Ulsan.

現代日本語の談話に於ける文末不整文についての研究
—特にその表出背景と類型化を中立に—

金 東 完
日語日文學科

〈要　　約〉

文の構文的構造を考える時。文末の述語は、その基本的骨組を成していると言えるが、実際の日常談話に於いては、いろいろの背景や要因などによりそれの省略されることが決して稀ではない。

本稿では、そのような文構造を文末不整文と称しながら、その概念規定や表出背景を明らかにする一方、映画の台詞や小説の会話文などを研究資料として採り、種々の表現意図による類型化を試みたのである。

現代 日本語의談話에 있어서의
文末不整文에 관한 研究
—特히 그 表出背景과 類型化를 中心으로—

金 東 完
日語日文学科

〈要　　約〉

文의 構文的構造를 생각해 볼 때, 文末의 述語는 그 基本的인 骨組를 이루고 있다고 할 수 있을것이나, 実際의 日常会話에 있어서는, 여러가지 背景이나 要因등에 의하여 述語가 省略되는 일이 결코 드물지 않다.

本稿에서는 그와같은 文構造를 文末不整文이라 称하면서, 그 概念規定과 表出背景을 밝히는 한편으로, 映画의 台詞나 小說의 会話文등을 研究資料로서 채택하여, 여러가지 表現意図에 이한 類型化를 시도하였다.

I．始めに

普段、人間は自分のいろいろの思想や感情を表わすに於いて、何かの表現意図により言語形式をもって表出することになっている。この言語形式は、その媒体手段により大きく二つに分けられるが、その一つが文字言語。或いは、書き言葉であり、もう一つが音声言語、或いは、話し言葉である。

文字言語は、大体、その表出面で、ある程度の普遍的・定型的形式を取るのがその特性であるのに対し、音声言語の場合は、大体、個人的・偶発的形式を取るのがその特性であると言える。言い替えると、音声言語、つまり話し言葉は、書き言葉に比べ、その表出面での形式が変化に富むと言えるのである。

この変化は、話し言葉に於いていろいろの形で現れるが、一般に、倒置、補足、挿入、重複、省略などの、文構成要素の部分的移動や変動をはじめ、実際の音声面での強弱や高低、ポーズ、それから種々の変音などを挙げるのが普通である。又、この他にも、表出手段としての非言語的要素、つまり、身振り、手つき、態度などの身体言語まで、その範囲を広げることができると思う。[1]

本稿では、以上のいろいろの話し言葉の変化の中で、文構成要素の変動としての省略について関心を特ち、特に、その中でも述語の省略に注目しながらその様相を考察することにしたい。

考察に於いては、述語の完全な省略と共に部分的省略をもまとめ、それらの現れている文を文末不整文という名称で規定した後、論を進めることにする。文構成要素の省略の中で、主に述語の省略にだけ注目するようになったのは、普通の日本語文に於いて、一番重要な文構成要素が述語であり、このような述語の省略こそ、いろいろの思想や感情の伝達に大事な役割を果していると認められるからであるが、これについては、本論でもっと詳しく述べるつもりである。

処で、この文末不整文の考察に於いては、先ず、日本語文で述語の説定が必要か、他の文構成要素、つまり、主語や連体・連用修飾語との位相関係を理論的に明らかにした後、文末不整文の概念及び、その範囲の規定、それから、文末不整文の表出背景を考え、終りにその類型化を試みることにする。

尚、その研究対象としては、話し言葉の中でも、日常談話にその範囲を限定することにしにい。というのは、同じ話し言葉と言っても、それには、講演、講議、演説、会議、座談、日常談話などがあり、これらの中でいろいろの面で一番変化に富むのは、やはり、日常談話であるから

---

1) 話し言葉に於ける種々の変音については、あまり研究がなされていない現状であるが、次の論文を参照すること、
○金東完、現代日本語の談話に於ける変音現象についての研究（蔚山大研究論文集、1988）
尚、身体言語については、次の論著を参照すること、
○小林祐子、身振り言語の日英比較（英語教育協議会、1985）
○南不二男、言語と行動（大修館書店、1979）
○水谷信子 中・上級の話しことば教育（「中・上級の教授法」所收、文化庁、1980）
○清田潤、ボディランゲージ（話しことばの表現」所收、筑摩書房、1983）
○田中望、表情・動作による表現と理解（「話しことばの表現」所収、筑摩書房、1983）
○金東完、現代日本語の談話に於ける身体言語についての研究（蔚山大研究論文集、1987）

である。[2)]

それから、その研究資料としては、主にNHK制作の映画四本の台詞や、いろいろの小説の会話文を採ることにした。

つまり、以上の手続きを通じて、談話に於ける文末不整文の表出背景や、その類型化をある程度、とらえることができると思われ、こういうことは、話し言葉の全体的特徴や生理をあばくにも有益であろうと期待されるのである。

II. 本　論

1. 述語の設定は必要か。

本論を進めるに於いて、先ず、日本語では述語の説定が必要かを理論的に確かめ、それを明らかにして置かなければならないと思う。というのは、本稿のテーマが文末不整文であり、文末不整というのは多分に述語の説定をその前提としているからである。

述語について語る時、それと線条的に考え合わせなければならないのはあくまでも主語の存在である。それは言うまでもなく、どんな文に於いても述語は常に主語と呼応していると思われるからである。実に、文の型を一般に言う時は、大体、次の三つの型を挙げることになる。

1) (なにが)どんなだ。
2) (なにが)なんだ。
3) (なにが)どうする。

上の三つの文型には、大体の日本語文が当てはまることになるが、下線の引いてあるのがいわゆる述語である。ここに於いて、それぞれの述語は常に全体としての文を終わりにする働きがある一方、又，文をとりまとめる働きをしている。つまり、文の統一性・完結性を持っているのである。

例えば、文型1)に当たるものとしては、

4) 花が美しい。

のような文があるが、この文に於いて述語「美しい」はこの文がどんな有様を表わしているかを統一、完結している訳である。この場合、述語の表現対象は言うまでもなく、主語「花」である。この二要素が文型の基本的骨組ということになるが、実際の文に於いては、この二要素にそれぞれ修飾成分がつくようになり、文は段々複雑になっていくのである。

先ず、主語にそれを限定、規制する連体修飾語をつけて見ると次のようになる。

5) あの花が美しい。

文5)で「あの」という連体修飾語は、「美しい花」が「この花」でなく、「その花」でもない、あくまでも「あの花」であることを指定するようになる。これは又、述語を限定・規制する連用修飾語についても同しく言えるもので、こういう修飾語をずっとつづけて並べてみると次のようである。

6) 田中君の庭に咲いているあの花が見るたびにとても美しい。

2) 処で、具体的にどのようなものを「談話」と認めるかは相当むずかしい問題である。それは学界に於いても「談話」の概念定義についてはいろいろがあるなど、まだ定説らしいものが見当らない現状からも言えるようである。本稿では、「談話」を、自由な日常会話を指すものと想定して置きたい。即ち、音声上の緊張感や複雑な構文によることなく、ごく少数の話手と聞手との間で自由に行なわれるものを指すのである。

例文6)はかなり複雑な文になってはいるものの、やはりこの文の基本的骨組は下線の主語と述語である。すると、この例文の主語「花」はその上位語の連体修飾を受けている訳であるし、述語「美しい」もやはりその上位語の連用修飾を受けているのであるが、これを図式化してみると次のようになる。

7) 田中君の庭に咲いているあの花がみるたびにとても美しい

上の文の図式関係をよく観察してみると、やはりその叙述の中核は述語「美しい」にあるというのが分かる。というのは、実際に文法的役割としても、主語「花が」は述語「美しい」にかかっているし、これは連用修飾語「みるたびに」と「とても」の演じている役割と何等の変わりがないのではなかろうか。つまり、「美しい」という陳述を助けるものとして、どのぐらい「美しい」のかと言えば、その程度は「とても」であり、「美しい」と感ずる頻度数は「みるたびに」であり、又、何が「美しい」かといったら、それは「田中君の庭に咲いているあの花が」であるといえるのである。だとすると、要するに日本語文で主語は必要ではあるが、それが文の形態を決める決定的な要素ではないということになる。でも、述語はあくまでも文をまとめ、終らせるものであるし、言語上体の判断・叙述などを表わすものとして、特殊の場合を除いては必要であると言える。[3]

国立国語研究所編、「話しことばの文型(1)」では、こういう述語を文末部分と称しながら次のようにその重要性について述べている。[4]

「まず、文は、一般的に言って、表現者(話し手)の判断や命令や質問などを表現しているひとまとまりの言語形式である。表現者の意図は、意味的な面では、いくつかの成分の統合体に、また、音声的な面では文全体の音調に実現されるのであるけれども、その特徴的なものは、いずれも、文末部分に集中的にあらわれる。」

結局、日本語文の骨組は述語—本立てということになるのである。これは人称、数などが主語により決っており、それが述語を限定する英語とはまったく違って、日本語文の主語というものは、必要があれば付け加えるという付録的なものに過ぎないと言える。[5]

2. 何をもって文末不整文と言えるか。

日常の話し言葉は、書き言葉と違って一般に乱れ・くずれが多いと言われる。[6] 特に談話に於いては、その度合いが一層強いと言える。というのは、談話の場合は、相手が自分の話を聞いて

3) 特殊の場合とは日常の言語生活で頻りに使われる挨拶語や慣用的表現などに於ける述語の省略を指す。
4) 国立国語研究所、話しことばの文型(1)(秀英出版、1983)p.43～44。
5) 島田勇雄、口語文法(明治書院、1983)p.74,95.135参照
池上嘉彦、テクストとテクストの構造(「談話の研究と教育Ⅰ」所収、国立国語研究所、1983)p.20参照
国立国語研究所、日本語の文法(上)、1980.p.49～54参照
時枝誠記、国語学原論(岩波書店、1957)p.370～379参照
三上章、現代語法序説(くろしお出版、1980).p.73～98参照
現代語法新説(くろしお出版、1972)p.48～49参照
6) 大石初太郎、話し言葉とは何か(「話し言葉」所収、文化庁、1981)p.37 参照.

いるという時間的、心理的要因と周囲の物理的環境や、その時々の身体条件などによりその表現の仕方が左右されやすいからである。このような談話の乱れ、くずれとしては、大体、倒置、補足、挿入、重複、省略などが挙げられる。勿論、これらの他にも言語主体の表出音に於ける種々の音声的変化も当然含まれるだろう。

さて、文末不整文とは何を指すのか。ここで、「不整」というのは、「そろっていない」、「整っていない」、つまり「不完全」だということを意味しているし、又、文末とは、文の終わりを指すもので、これは多分述語を意味すると見てよかろと思う。だとすると、文末不整文とは、述語の欠けている、又は、あるにはあるが、全体としてそろっていない文を指すものと、いましばらくは考えておきたい。

処で、ここで二つ断っておきたいのがある。一つは、文末不整文というのは、述語の省略だけをさすのでなく、述語の一部分の欠けているものまでもさすということである。例えば、次の例文で、

1) さあ、今日はこないだの敵討ちφ[7] (三年たって、恋)

2) もしもし。は、はい。ちょっとお待ちください。だんなからφ (ちょっといい夫婦)

3) 入口で立話なさらないでφ (三年たって、恋)

4) 困ってるわけφ (三年たって、恋)

例文1)、2)は、述語が完全に抜けている場合で、1)はその後に「～をする、～をするつもりだ、～をやらねばならない」などの述語が省略されている場合、それから、2)は、「来ました、電話です」などの述語が省略されているところであろう。これに反して、3)は、「下さい」などの補助動詞の抜けている場合、それから、4)は、「～ですか」などの助動詞の省略されているところであろう。文末不整文とは、例文1)、2)のように述語の完全に抜けているものばかりでなく、3)、4)のように一部の述語要素の抜けているものまで含めての概念であるというのである。いずれも、文末形式としては不完全であると認められるからである。

文末不整文についての断りのもう一つは、たとえ、一見して文末述語の抜けているものといっても、その文の前に述語の出ている、いわゆる倒置文の場合とか、又、倒置文ではないにしろ、その欠けている述語の位置に、いろいろの間投助詞などの存している場合は、文末不整文から除くということである。例えば、次のような倒置文は、当然のことながら文末不整文でないとするのである。

5) 公園で会ってるの見たって言うのよ、隣のおばあちゃんが (わが美わしの友)

6) いたよ、うちに。 (ちょっといい夫婦)

7) あ、広次が来てるの。若い娘さんといっしょに。 (三年たって、恋)

例文5)～7)は、それぞれ文末に来るべき述語が、もうすでにその前の言語形式に現れている倒置文である。書き言葉と違って、談話では常に物を考えながら同時に発言するという緊迫性のために、こういう倒置文がいくらでも現れる。つまり、前の発言に於いて言い技かした部分をすぐ補うのである。[8]

7) 記号φは、文末述語の省略を指すものとする。

8) 補うといっても、それは情報の重要度によりなされる。例えば、例文6)に於いても、「いたよ」が「うちに」より情報の面で、もっと重要であることは言うまでもないだろう。このような原則は大体の倒置文に適用できると思われる。

それから、倒置文ではないが、その抜けている述語の所にいろいろの助詞が埋め合わせられているのも、不未不整文から除外することになる。

8）弟が、でも、君の友達だったとはねえ　（三年たって、恋）

9）風呂へ入ると、プーンとひのきの香りがしてなえ。　（ちょっといい夫婦）

10）チ、真珠の首飾りとか、羊の毛皮とかさ。　（ちょっといい夫婦）

上の例文に於いては、それぞれ、文末の述語がない代りに、いろいろの助詞が入っているが、こういう助詞は、その文に於ける役割という面で、それぞれ文末述語の代用をやっているのではないかと思われる。言い替えると、上の例文に於いてそれぞれ文末に来るべき述語の位置に、そのシグナルとして助詞が位していると見るのである。実際に、例文8)では、「思いもよらなかった」、「全然知らなかった」などの述語の指向する驚きの感じを助詞「ねえ」をもってまざまざと表わしている。又、例文9）に於いても、その文末に來るべき述語「いいなあ」の指向する感動の感じを助詞「なあ」をもってまざまざと表わしているし、こういうことは例文10）に於いても同じく言える。これは、もうすでに分かりきったことは、終りまで言わなくても済むという日本語の含蓄性、省略性の一面を覗くことになるのであると思われる。

さて、このような助詞が文末述語の代用をしていると言ったが、その経緯を思うと、やはり文末述語の構成要素になっている助詞を除いた述語の省略である。例えば、例文8）に於いても、もともとは次のようななりゆきを経ているのではなかろうか。

8″）弟が、でも、君の友達だったとは全然知らなかったねえ。　（もともとの文）

8′）弟が、でも、君の友達だったとは全然知らなかったねえ。　（述語の省略）

8）弟が、でも、君の友達だったとはねえ　（助詞の述語代用）

確かに、例文8)に於ける文末の助詞「ねえ」は、話手の驚きの気持を端的に表出する働きをしていると見るべきで、この場合、助詞「ねえ」は、無くなった述語の埋め合わせになっていると思われる。そういう訳で、本稿ではこのような文も文末不整文のかテゴリーから除外することにした。

つまる所、文末不整文とは、種々の場面や先行文脈、或は、言語習慣乃至、心的要因などにより、文末に来るべき述語がその文のどこにも現れない文を指すものと規定しておきたいと思う。

3．文末不整文の表出背景

本論の始めには、文末不整文に対する考察を進めるに於いて、その前提条件としての述語の設定という問題を考えてきた。それは、文に於いては、その形態や長短に係わらず、常に陳述を負う文末の述語がその文の成立条件になっていると思われたからである。それから、その次には文末不整文についての概念や範囲を規定したが、今度は、そういう文末不整文の表出される種々の背景について述べる順序である。

実に、談話に於けるいろいろの文末不整文をよく観察してみると、それは個別的・偶発的であるように思われ、何かの範疇や原則をとらえるのが困るような気がする。でも、数多くの談話資料をつくづく考えて見ると、やはり、そこには何かの背景があるに違いない、すくなくても文末不整文を言語主体が表出するには、その表現意図に伴う種々の言語的・心的・或いは、物理的要因があるはずだと認められるのである。

「話しことばの文型1)」では、この表現意図について、言語主體が文全体にこめるところの、いわゆる命令、質問、叙述、応答などの内容な指すと記述した後、このような表現意図には、臨時的表現意図と一般的表現意図があると認めている。[9] 一般的表現意図とは、ことばの形式との対応が社会的習慣として認められるのであるが、これに反して臨時的表現意図が何を意味するのかは記述していない。

多分、これは先にも述べた所の、個別的・偶発的表現意図を指すものと考えられるが、本稿の研究があくまでも談話に於ける文末不整文をその対象としているからには、当然、そのような臨時的表現意図も含まれる。但し、本稿の研究に於ける主たる関心事は、文末不整文の文型や、その構成要素の配列、組み合わせなどにあるのではなく、あくまでもその文末不整文の表出される種々の背景やその意味分類などにあるのである。

という訳で、本稿では、文末不整文の表出背景として、おおざっぱではあるが、次の三つの要因を挙げておきたい。

① 先行文脈や場面により

② 言語習慣により

③ 心的要因により

先ず、① 先行文脈や場面による文末不整文は、次のような場合である。

1) Aゆうべ、電話してきたの。

Bえ。

Aあら、菊地さんのほうはまだϕ（三年たって、恋）

2) Aもしもし。は、はい、ちょっとお待ちください。

Bだんなからϕ （ちょっといい夫婦）

例文1）のϕ印の場所には、「電話してこなかったの」などの文末述語が省略されていると見るべきで、これは確かに先行文脈による文末不整文である。

又、例文2）の場合は、外からかかってきた電話を取り次ぎながら発する言葉で、これは場面による文末不整文であると言える。

次に、言語習慣による文末不整文には、次のようなものがある。

3) 花より団子

4) ごちそうさま

上の例3)、4)は、慣用句や挨拶語に於ける、言語習慣的な文末不整文であるが、こういうものは、その不整が社会的に固定している、つまり誰もその次に来るべき述語を期待しないものである。したがって、これらは文末不整ということも困るようである。

終りに、心的要因による文末不整文でよるが、これについて記述することは、そんなに簡単でない。というのは、こういう文末不整文が大体、その時、その場での種々の心理条件や身体条件、或いは、物理的環境などによって変わりやすい、非常に恣意的なものであるからである。だからこそ、前の二要因、即ち、先行文脈や場面とか、言語習慣などの要因はとらえやすいが、この心的要因は、なかなかとらえにくいし、又、とらえたにせよ、何かの類型を発見することが困るようである。

9) 前掲書、p.4. 参照

とは言うものの、その反面、このような心的要因による文末不整文には、必ず言語主体の表現意図に於ける何かの要因があるに違いないし、それをつかめることこそ、談話の具体的成立、又は、その生理をあばくのに有益であると思われるのである。それで、本稿では、文末不整文の表出に於いての言語主体の心的要因をいくつか類型化することにより、それを考察することにした。

なにしろ、以上の文末不整文の表出背景を並べると、次のようである。

—談話に於ける文末不整文の表出背景—

- 先行文脈や場面により
  - 先行文脈
  - 先行場面
- 言語習慣により
  - 慣用句
  - 挨拶語
- 心的要因により
  - 残念
  - 弁明
  - 判断
  - 命令
  - 強調
  - 驚き
  - 親しみ
  - 勧誘
  - 躊躇
  - 恥ずかしがり

大体、以上の三要因により、文末不整文が表出されると言えるが、ここで一つ明らかにしておかなくてはならないことがある。それは、これら三要因は、それぞれ区別すべきではなく、お互いに有機的関係を結んでいるということである。即ち、先行文脈や場面は、おおまかに言えば、すべての文末不整文の背景になっていると言えるもので[10]、これはあくまでも全体的に見てのことであり、これによる文末不整文を意味的に類型化したものが、心的要因による文末不整文であると言える。

こういう面では、言語習慣による文末不整文もやはりその事情を同じくしていると思われる。ここでは、副題にも明らかにした通り、談話に於ける文末不整文を考察するに於いて、主にその表出背景としての心的要因を中心に記述しようとしているから、これからはいろいろの心的要因による文末不整文だけを観察していくことにする。

10) 久野暲氏は、その著「談話の文法」(大修館書店、1980)で、省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能(recoverable)でなければならないということを省略の根本原則としてあげている。ここでいう非言語的文脈が本稿の場面に当たるものであるが、このような考え方は、文脈や場面を広義に解釈したものであると思われる。

4．文末不整文の諸類型

談話の文末形式の不完全さを観察するには、大体、次の二つの方法により区切ることが出来ると思う。

① 意味的類型化

② 形態的類型化

①の意味的類型化とは、その文末不整文の指向する表現意図を種々の意味に分けることであり、②の形態的分類とは、文末不整文の終止部に於ける外形的言語形式により分けることである。もっと詳しく説明すれば、①の場合は、文末不整文の表出内容により、不満を表わす、弁明を表わす、驚きを表わす、、、などに分けらけることであり、②は、体言止め、テ止め、いろいろの助詞止めなどのように分けられることである。

処で、この二つの分け方は、お互いに遊離しているものではなく、常に融合していると見なければならぬと思う。それは、文末不整文の表出内容に於いては、それに対応するそれなりの外形的言語形式が存すると考えられるからである。勿論、これはあくまでも個別的、偶発的であるが為に、何かのルールみたいなものを発見することは困るようである。

実際に、文末不整文の表出内容が何であるかを判断する根拠は、文全体を見てのことであるが、その際、文末の言語形式は、その判断の決手になると思われる。但し、それが先にも述べた通り、いろいろの要因により分化されるだけであるが、ここでは、その表出内容との対応に於いての普遍性(これを代表性と言ってもよかろう)のみを論ずることにする。

いずれにせよ、これからは文末不整文の表出内容により種々の意味的類型化を試みると同時に、その言語的代表形式をも併せて考察することにしたいが、こうすることによって、談話に於ける文末不整文の表出心理や、その言語形式をある程度は明らかにすることができると期待されるのである。

(1) 残念

談話に於いて、残念[11]の気待を表わす文末不整文には、次のようなものが代表的に現れる。

1) あれ、なんだ。少し話ぐらいしてくると思ったのに。(三年たって、恋)

2) 休みならこんな店、来なくてもいいのに。(ちょっといい夫婦)

3) 私はひのきの風呂おけプレゼントしてあげたのに。(ちょっといい夫婦)

4) 昨日の工合では、こんな天気になろうとは思わなかったのに。(田舎教師)

5) 自分では強そうなことを言っていらっしゃるくせに。(出家とその弟子)

6) 死んだらガッポリ取ろうって魂胆だったくせに。(わが美わしの友)

大体、残念を表わすには、その文末形式として逆接助詞「のに」、「くせに」などが現れ、その次は何も表わさなくていいのである。つまり、残念を表わす代表形式は、「のに」、「くせに」である。

(2) 弁明

弁明を表わす文末不整文には、次のような用例がある。

1) Aあ、タバコでしたらどうぞ。
　Bすいません。ちょっと切らしちまいまして。　(ちょっといい夫婦)

2) ちょいと顔をけがしたもんで、あんたに恥ずかしくて合わせる顔がないちゅうんで。
　(わが美わしの友)

3) あたしはね、うちのために良かれと思って。　(母上様・赤沢良雄)

---

11) 残念とは言ったものの、実際の内容によっては、「不満」とか、「叱り」とか言ってもよさそうであるが。ここではそれを全部含めて「残念」と称することにした。

4) こないだの狂言の筋は愚劣でして。 (友情)

5) いや、なに、のどが渇いているんで。 (残りの雪)

又、次のように、接続助詞「ので」、「から」により表わされる場合もある。

6) 来ようかと思ったが、なんだか留守のような気がしたので。(友情)

7) え、お手伝いのほうは、ええ、あのう、弘たちゃ、あの、おばあちゃんもおりますので。 (母上様・赤沢良雄)

8) 私もいつまでもいたいのですが、お師匠様にないしょできたのですから。 (出家とその弟子)

9) いえ、はじめたばっかりですから。 (三年たって、恋)

上の例を通じても分かる通り、やはり談話に於いて弁明の気持は、接続助詞「て(で)」により現れると共に、場合によっては「から」、「ので」などによっても表わされる」と言ってよいだろう。

(3) 判断

文末不整文に於ける判断の気持は、主に接続助詞「けど」、「が」などにより現れるようである。

1) いいえ。あれはやっぱり菊地先生が頼んだことだろうとは思うんですけど (三年たって、恋)

2) あの、あたし、高等女学校出てるんですけど。 (ちょっといい夫婦)

3) ああ、まあ、どっちでもいいけど。 (三年たって、恋)

4) その信念が先生の心によく映るはずだと私は思いますが。 (心)

このような接続助詞により判断を表わす表現法は、言葉の語感を和らげる効果があるように思われるが、これは日本人の言語行動の特色が、事実を正しく伝えるだけでなく、どのように相手を尊重しながら伝えるかについての関心にあり、そして基本的には、自己と他人を本来対立するものとしてとらえず、共存するものという意識でとらえる態度に由来するものと思われる。[12] このような接続助詞は、もうすでにその意義を失って、終助詞化されたものと考えてもよさそうである。[13]

談話に於いては、この他にも度々、引用を表わす助詞「と」によって、判断を表わす場合も稀ではない。

5) 今井先生ならあの子の心を傷づけないでなんとかうまく話してくださるだろうと。 (三年たって、恋)

6) 先が長いですからねえ、主人にも長生きしてもらいませんと。(母上様・赤沢良雄)

7) お宅ではあんなに無愛想だったんで、今日もお茶になんか誘ってくださらないのかと。 (三年たって、恋)

こういう助詞「と」による終止に対して、「話しことばの文型(1)」では、自分の判断や叙述を確認して終止する表現であると述べている。[14]

(4) 命令

命令を表わす不整文の場合は、大体、その文末形式が接続助詞「て(で)」により終止している。

1) 小六さん、茶の間から始めて。それとも座敷のほうを先にして(門)

2) もうしばらくこうさしといて(雪国)

---

12) 水谷信子、中・上級の話し言葉教育(「中・上級の教授法」所収、国立国語研究所、1980)p.88～89参照

13) 大石初太郎、話し言葉とは何か(「話し言葉」所収、文化庁、1981年)p.48.参照
佐藤喜代治、日本文法要論(朝倉書店、1979年)p.86.p.172～183参照
三重敏、日本文法一主語と述語(武蔵野書店、1978年)p.18参照
佐久間鼎、現代日本語法の研究(厚生閣、1952年)p.272参照

14) 前掲書、p.63. 参照

3) 冷藏庫にね、かますの干物が一枚入ってますから、それ焼いて、ね、一杯飲んでて。
(ちょっといい夫婦)

4) おじいちゃん。だいじょうぶですか。浩、ちょっと来て。 (わが美わしの友)

5) 入口で立ち話なさらないで。 (三年たって、恋)

このような命令表現は、大体、女性語に見られるもので、男性語の場合は、「て(で)」の次に「くれ、ください」などの補助動詞の来るのが普遍であるように思われる。但し、女性の場合は、「くれ、ください」などの補助動詞の指向する、相手への強い要求という感じを和らげる、或いは、避けるためにこのような命令表現を使うようになると考えられる。

(5) 強調

談話に於いては、自分の話した内容をもう一度、相手に強調する、或いは自分自身に確認したい心理上、既に表出した言語内容の一部を繰り返すことが度々ある。

1) それより、いい記事書けよ、いい記事 (ちょっといい夫婦)

2) あ、帰ってきた。ね、ちゃんと言ってください。きょうこそはちゃんと。(わが美わしの友)

3) えっ？いやほんとですよ。ほんと

こういう場合、下線の次に来るべき述語が省略された訳であるが、このような強調のための繰り返しに於いては、当然のことながら、常に前文の内容上、一番重要な情報を表わしている部分だけを繰り返すようになると思う。このような点では、次の例文も同じである。

4) アホ。これでいいんだよ。これで (ちょっといい夫婦)

5) 近ごろね、学校教育ってなっちょらんからだ。ええ、だから親がしっかりせにゃいかんのだ、親が。
(わが美わしの友)

6) おんなじことなんだよ。人間が死ぬのも、カラスが死ぬのも。地球にとっちゃ、おなじことなんだ。地球にとっちゃ
(わが美わしの友)

(6) 驚き

談話で、驚きの気持を表わす不整文には、次のような用例がある。

1) Aえっ、どうしてくれるんです。慰謝料いただけます。
Bい、慰謝料。 (わが美わしの友)

2) A時間をかけたらだめだ。いきなり土下座しちゃうんだ。
B土下座。 (ちょっといい夫婦)

3) Aちょいと顔をけがしたもんで、あんたに恥ずかしくて合わせる顔がないちゅうんで、、、、
Bまあ、けがを。 (わが美わしの友)

4) Aどうだい、なにか食べに行かないか。
B食べに。 (わが美わしの友)

上の用例でも分かる通り、このような驚きを表わす不整文に於いても、やはり、前の強調の場合と同じく、一番重要度の高い情報だけを繰り返すことになるが、但し、強調の場合と区別できるのは、強調の場合は、自分の話した部分の繰り返しであるが、驚きの場合は、あくまでも相手の話した部分の繰り返しということである。

(7) 親しみ

談話では、相手との身分関係により終りまで言わないで、そのまま体言止めにすることが稀ではないように思われ、その時の身分関係とはあくまでも親しい関係を指すのである。

1) Aもしもし。なんだ、忘れもんかい。どこにいるんだい。
Bバス停の電話ボックス。 (ちょっといい夫婦)

2) Aふふん、こりゃな、「巌頭の感」ちゅうてな、藤村操という一高生が、日光の華厳の滝で

投身自殺したときの遺書なんじゃ、

Bふうん、いつごろのこと。 (わが美わしの友)

3) 板稿っていうと、あたしが生れたとこ (母上様・赤沢良雄)

4) だけど、なんてったって、あんたは辛せ。 (母上様・赤沢良雄)

このような体言止めの表現法は、その次に「です(か)」、「だ(なの、なのよ、なんだ)」などの断定を表わす助動詞が来ることになるが、やはり、お互いの親しみにより省略されるのであり、こういう形が言葉としては、もっと自然であり、自足的であると言える。

(8) 勧誘

談話で、他人に何かを勧めるという表現意図は、主に助動詞「た」の仮定形「たら」により表わされる。

1) 今夜は家へお泊りになったら？あの屋根が家なのよ。(午後の曳航)

2) お酒が過ぎるのよ。少しお控えになったら。 (苑のワルツ)

3) 祝いのものでございますから、お慰みに一口召上ってみたら。 (雪国)

こういう場合、話手の表現意図は、省略された述語の復元なしにも充分表出できるし、むしろ、このままで自然であって、もし、述語の復元ができたら、その文に冗長度が増すようになると思われる。

又、この他にも、次のような文末形式も見られる。

4) じゃ、ひのきのお風呂にすれば (ちょっといい夫婦)

(9) 躊躇

ためらいの気持を表わす場合は、主に「でも」、「だって」などにより表わされるようである。

1) Aいいじゃねえか。見てやろうよ。

Bでも。 (わが美わしの友)

2) Aまったく気がきかんな、お前さんも。たった今、散歩に出たってそう言いなさい。

Bだってえ。 (わが美わしの友)

(10) 恥ずかしがり

談話の文末不整文に於いて、恥ずかしさを表わす文末形式には次のようなものがある。

1) さあ、ガールフレンドの一人ぐらいには考えてるかもしれないけれど、恋人までは。

(三年だって、恋)

2) Aは、そんなこと言って、ほれてんでしょ。

Bいまさらあ、 (ちょっといい夫婦)

以上の分析から、談話の文末不整文に於ける表現意図とそれに対応する文末の言語形式との分布を考え合わせる時、それには大体、次の二つの形式が存することがうかがわれるようである。それは、本論(3)のの文末不整文の表出背景に於いても述べた通り、一般的表現意図による形式と、臨時的表現意図による形式である。一般的表現意図による形式とは、それが社会的にある程度、固定していて、その形式の類型化がとらえやすいが、臨時的表現意図による形式は、その表現意図がかなり恣意的なのでその形式の類型化がむずかしいようである。

従って、ここでは、一般的表現意図による形式だけを図にまとめて見たいと思うが、それは次のようである。

---

15) 但し、勧誘を表わす「たら」の場合は、それがもともとは過去、完了を表わす助動詞「た」の仮定形で、その次に来る述語として、「どうでしょう」などが予想できるが、文語では「ば」と連なって使われたものである。それが今日では、「たら」だけで使われているから、「たら」は前後の文を結びつけて仮定の意を表わす接続助詞の役割を果していると認められるのでここに入れたのである。
これについては、下記の書を参照すること。
佐久間鼎、現代日本語法の研究（くろしお出版、1983）p288 参照

—談話の文末不整文に於ける一般的表現意図と文末形式—

表　現　意　図	文　末　形　式
残　念	のに、くせに、
弁　明	て、で、ので、から
判　断	が、けれども(けれど、けど)、と
命　令	て、で
躊　躇	でも、だって
勧　誘	ば、たら

上の図を見て分かる通り、やはり、談話の文末不整文に於いては、その文末に主に種々の接続助詞が現れるようである。[15)]

このような接続助詞は、すべて前項要素と後項要素とを結びつけるという意味・役割上の関係から、その次に来る後項要素を予期していると言える。処が、その後項要素がいろいろの要因により省略されるのであり、この場合、文末形式としての接続助詞は、その省略された後項要素を予期するシグナルとしての役割を果していると見られる。だからこそ、その次には何も要らなくなるのであり、もし、この場合、後項要素が付け加わるとすると、文の冗長度が増すようになると思われる。

III. 結び

一般に、話し言葉、特に談話に於いて、みだれ・くずれが多いと言われる事実は、物を考えながら話すという、思想と言語表出との同時性と共に、いろいろの話線に於ける心理的要因や物理的環境などに負う所が多いと思われる。この場合、話手は一々言わなくても聞手に分かると予想できる表出部分は、すべて切り捨てるという言語行動を取るのが普通であるように思われる。

表出部分の切り捨てに於いては、当然、情報の重要度の判定がそのものさしになる訳であろうが、通常の日本語文の特性から見る際、文構成要素の中で一番重要度の高い部分が述語であるということは言をまたないことであろう。

本稿では、そういう述語の省略文、つまり文末不整文の成立の背景には、先行文脈や場面、言語習慣、それからいろいろの心的要因が存するということを考察した後、主に心的要因による談話の文末不整文を類型化しながら観察してきた。その結果、一般的表現意図に於いては、その文末の言語形式に、大体、接続助詞が現れ、臨時的表現意図に於いては、主に体言止め、或いは、体言＋助詞の言語形式で間に合わせるという事実をとうえることができたと思う。このような臨時的表現意図は、かなり恣意的な属性を帯びて居り、もっと詳しい観察が要求されるのであるが、これについては、後日の研究を期したい。

参 考 文 献

○大石初太郎、話し言葉とは何か（「話し言葉」所収、文化庁、1981）
○国立国語研究所、話しことばの文型(1)（秀英出版、1983）
○国立国語研究所、話しことばの文型(2)（秀英出版、1983）
○小林祐子、身振り言語の日英比較（英語教育協議会、1985）
○南不二男、言語と行動（大修館書店、1979）
○水谷信子、中・上級の話しことば教育（「中・上級の教授法」所収、文化庁、(1980)
○島田勇雄、口語文法（明治書院、1983）
○池上嘉彦、テクストとテクストの構造（「談話の研究と教育Ⅰ」所収、文化庁、1983）
○国立国語研究所、日本語の文法(Ⅰ)（文化庁、1980）
○水谷修、話しとばの表現（筑摩書房、1983）
○久野暲、談話の文法（大修館書店、1980）
○時枝誠記、国語学原論（岩波書店、1957）
○三上章、現代語法序説（くろしお出版、1980）
○三上章、現代語法新説（くろしお出版、1972）
○佐藤善代治、日本文法要論（朝倉書店、1979）
○森重敏、日本文法一主語と述語（武蔵野書店、1978）
○佐久間鼎、現代日本語法の研究（厚生閣、1952）
○金東完、現代日本語の談話に於ける省略表現についての研究（外大、1985）
○金東完、現代日本語の談話に於ける身体言語についての研究（蔚山大、1987）
○金東完、現代日本語の談話に於ける変音現象についての研究（蔚山大、1988）

例 文 資 料 文 献

本稿に於いては、次のような資料から用例を引いた、

○NHK、映画「三年たって、恋」
○NHK、映画「ちょっといい夫婦」
○NHK、映画「母上様・赤沢良雄」
○NHK、映画「わが美わしの友」
○武者小路実篤、「友情」（旺文社文庫、1984）
○島崎藤村、「破戒」（岩波文庫、1984）
○夏目瀬石、「こころ」（角川文庫、19879）
○倉田百三、「出家とその弟子」（角川文庫、1983）
○三島由紀夫、「午後の曳航」（新潮文庫、1979）
○立原正秋、「残りの雪」（新潮社、1978）
○夏目瀬石、「門」(角川文庫、1976)
○川端康成、「雪国」（新潮文庫、1973）